

---

# 10年間待っていた思い

伝説・改

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

10年間待っていた想い

### 【Nコード】

N1099N

### 【作者名】

伝説・改

### 【あらすじ】

梓が結婚して、祝福する遼祐と唯。

ただ現実には二人とも色々と悩んで……？

本作は「けいおん！LOVE！LOVE！LIVE！」シリーズの短編小説です。

「まさかなあ、梓が一番最初とは」

「凄いよあずにゃん！わたしたちより先に大人になっちゃったね！」  
「ど、どうも……」

苦笑いしながら梓は唯の祝福っぽい言葉にお礼を言った。

「いや、でもなあ……うん、おめでとう梓」

「さつきからそればかりだぞ律」

「でも確かにそれしか言えないぐらいの感動だったわ」

隣にいた律と澪と紬もそんな感じで梓の幸せを祝福した。

そつ、なんと放課後ティータイムの一番下の後輩である梓が、結婚しやがったのである。

お相手はなんと科捜研の人だって。

どんな感じで知り合ったかは知らんが、とりあえず俺は素直に祝福した。

……読者のみなさん、お相手はもう誰か分かると思いますがあえて口には出さない事にします。はい。

「あずにゃん、すつごく綺麗だったね！」

結婚式の帰り。周りは既に真っ暗であった。

唯と二人で俺たちは家路についていた。それにしても、なんかテンションがこいつさつきから上がりっぱなしなんすけど。

「だって、結婚だよ。わたしも早くそんな人が欲しいな！」

……ああ、そうだね。

「つたく、人の気も知らないでそんな事を……。」

結局、俺はいつまで経ってもこいつには付き合ってくださいすらまともに言えなかった。

ずっと仲のいい友達のまま。今の関係より先に進めなかった。

多分、今の関係がここち良いのかもしれない。

「ただ俺には、それが満足できない。満足と言うか……まあいい。とにかく、俺は結局唯には好きという一言が言えなかった。」

大学も一緒だったのに、卒業しても言えなくて。いつのまにかもう俺たちも25歳。

……もう10年。こいつ出会って、それぐらいになる。

なのに、あのまま変われなかった。なにやっとなるんだ俺は。バカじやね？ホント自分の情けなさに溜息が出る。

「りょうくんにもそんな人はいないの？」

「ああ……いないんだよなあ……これが」

いるだろうがバカ。隣に。今話しかけてきた奴。

まあそんな人と言う関係ではないけど、なりたいと思っている。

……ああ、なんかバカらしくなってきた。

だからどうしてだろう。俺はやけになってこんな事を言った。

「唯、今から時間あるな？」

「うん、大丈夫だよ。明日もお仕事お休みだから」

「んじゃ付き合え」

俺は唯の手を引いて、歩き出した。

「たつくよ、なにがけっこんだちくしょー!!」

「……」

あれ？なんか立場が逆じゃね？

おかしいよ。俺がそういいたかったんだよ。なんで君が言ってるの？

「あずにゃんのばか！もう知らないもんね！ひつく……」

今いるのは俺の家。

コンビニで買って来た酒を広げて俺はやけ酒をする予定だった。

なのに何この状況。俺が言いたかったんだよああやって。

なんでよ？俺全然酔わない。どうして？

……いや、あいつがただ酒に弱いだけか。ビール缶一本であれだ。飲ませるんじゃない。一人で飲めば良かったチクショ！。

「あゝもう、しらない！わたしはどうすればいいんだゝ！」

「どうもこうも、そういう奴を見つけりゃいいだろ」

これは明らかに自分に言わなければならない事であって、人に言うべきことではない。

それにしても唯さん、あんた未だに恋人もいないんっすか。今さらだけど。そして俺の言えた事じゃないけど。

「ふゝんだ、わたしはギー太と仕事がいびとだもゝん！」

「……仕事が恋人って」

なんつー古い表現。つい笑ってしまった。

「あゝ、わらったゝ！」

「だって、仕事が恋人って……プププ」

「もう、ゆいちゃんおこったぞゝ！」

そう言つて、唯は酔つた勢いなのか、いきなり俺に抱きついてきやがった。

そしていつのまにかベッドに俺が押し倒されている風景になつてしまつた。

……なんてことだ。こんな事があつてもいい訳？

「分かつた、俺が悪かつたから離せ唯」

「……やだ」

「やだじゃない」

「やだ」

「離せ」

「やだ」

「……」

もうお好きにどうぞ。

「りょうくん……」

「なんだよ……」

唯の顔を見た瞬間、俺は頭が真っ白になりそうだった。

その顔は少し赤くなつていた。酒の影響か。

だけど、それが色っぽく見えて、俺の理性が少しはがれていった気がした。

「……どうして」

「……」

「どうして、なんだろうね……？」

「何が」

「寂しかったんだよ。わたし」

「だからなにが」

やっぱり酔ってる。  
本気でそう感じた。

「……言つてよ、りょうくん」  
「なにを」

「……りょうくんの、気持ち」  
「……へ？」

ダメだこりゃ。完璧に酔ってる。

しかも、俺も。あんな幻聴まで聞こえたよ。

……幻聴じゃないなあれ。どう考えてもこいつが本気で喋ってた。

「ずっと待ってるのに、何にも言わないんだもん、りょうくん……」  
「唯……、お前……」

「大好きだよ、ずっと、好きだったのに……りょうくんの事……」

その瞬間、頬に何かが零れ落ちた。

唯の涙だった。唯の瞳から、光る雫が零れ落ちていた。

それはどんどん激しくなっていく、ついには唯は俺の胸にしがみついて声を出して泣き始めた。

……なにやってたんだ俺。こいつを苦しめてんじゃねえか。

10年間も、待たせちゃったんだじゃねえか俺は。なんてバカな野郎だ本当に。

「……唯」  
「……何？」

顔を上げて、唯は上目遣いでこっちを見てきた。

……可愛すぎる。いやいや落ち着け。

俺は、勇気を振り絞って、それを口にした。

「……結婚しよう、唯」

「……うん」

「絶対に、幸せにするから。10年間待たせた分、何百倍にして返してやる」

「……うん」

「……ありがと、ごめんな、唯」

「……うん」

それから数カ月。

「まさか唯とお前がね……まあ予想はしてたけど」

律が悔しがるように呟く。へへへ、ざまあみる。俺たちが見事に2  
番目取ってやったぜ。

「二人とも、幸せにな」

「うん！ありがとね、澪ちゃん！」

白いウェディングドレスに身を包んだ唯は、笑顔でそう言った。

……俺って幸せ者だな、おい。



さらに数年後。

「パパ〜！」

「どうしたんだよ」

「ママが呼んでたよ！」

「唯が？なんかしたかな俺」

「りょうく〜ん！！掃除手伝ってよ〜！」

「え〜、めんどくさいからパスね〜！」

「10年間待たせた分倍にして返すって言ったのは誰だったかな〜？」

「……こいつ」

「行こうよパパ、ママのお手伝いしようよ〜」

「……分かった。んじゃ、行くか」

「うん！ほら早く早く！」

「待てって、走るとこけるぞ、柚〜！」

「ゆっちゃん、りょうく〜ん、早くして〜！」

「ああ、分かった分かった。いま行くから……ったく」

子供も出来た。

名前は日暮柚<sup>ゆり</sup>。

ゆいとりょうすけの子供だからゆりって、なんとも唯らしいネーミングだ。

まあ俺も異論はなかったし、それに決定した。

……唯と出会って15年。

これからも、こいつと、柚とずっと一緒にいる。  
だから、これからもよろしくな。

唯。

遼祐「わゝ、バカ！ 柚！ 服引つ張るなっつゝの！ 唯も一緒になつてするなゝ！ 二人して押し倒すなゝ！ ！」

律「…… どんな夢見てるんだこいつ」

漣「それに誰だよ柚って……」

浩史「でもすつごく幸せそうな顔だね」

紬「ホント。起こしてあげるのが可哀想なぐらい」

和「でも起きないと練習行けないでしょ？ それに唯も起こさないと

……」

唯「ゆっちゃゝん、ママといっしょにパパと遊ぼうね……」

律「…… ゆっちゃゝんと柚って同一人物なの？」

梓「せんぱゝい！！ 早く練習きてくださいゝい！！ ！」

続きはないZE

（後書き）

あんなオチですいません。

ただどこれを正史にしちゃったら本編終了しちゃうので……（汗

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1099n/>

---

10年間待っていた想い

2010年10月9日02時42分発行